

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ

（例）何しろ項羽《こうう》と云う男は

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）大将|呂馬通《りよばつう》は

「何しろ項羽《こうう》と云う男は、英雄の器《うつわ》じゃないですな。」

漢《かん》の大将|呂馬通《りよばつう》は、ただでさえ長い顔を、一層長くしながら、疎《まばら》な髭《ひげ》を撫でて、こう云った。彼の顔のまわりには、十人あまりの顔が、皆まん中に置いた燈火《ともしび》の光をうけて、赤く幕営の夜の中にうき上っている。その顔がまた、どれもいつになく微笑を浮べているのは、西楚《せいそ》の霸王《はおう》の首をあげた今日の勝戦《かちいくさ》の喜びが、まだ消えずにいるからであろう。

「そうかね。」

鼻の高い、眼光の鋭い顔が一つ、これはやや皮肉な微笑を唇頭に漂わせながら、じっと呂馬通《りよばつう》の眉の間を見ながら、こう云った。呂馬通は何故《なぜ》か、いささか狼狽《ろうばい》したらしい。

「それは強いことは強いです。何しろ塗山《とざん》の禹王廟《うおうびょう》にある石の鼎《かなえ》さえ枉《ま》げると云うのですからな。現に今日の戦《いくさ》でもです。私《わたし》は一時命はないものだと思います。李佐《りさ》が殺される、王恒《おうこう》が殺される。その勢いと云ったら、ありません。それは実際、強いことは強いですな。」

「ははあ。」

相手の顔は依然として微笑しながら、鷹揚《おうよう》に頷《うなず》いた。幕営の外はしんとしている。遠くで二三度、角《かく》の音がしたほかは、馬の嘶《いなな》く声さえ聞えない。その中で、どこことなく、枯れた木の葉の匂《におい》がする。

「しかしです。」呂馬通は一同の顔を見廻して、さも「しかし」らしく、眼《ま》ばたきを一つした。

「しかし、英雄の器《うつわ》じゃありません。その証拠は、やはり今日の戦ですな。烏江《うこう》に追いつめられた時の楚の軍は、たった二十八騎です。雲霞《うんか》のような味方の大軍に対して、戦った所が、仕方はありません。それに、烏江の亭長《ていちょう》は、わざわざ迎えに出て、江東《こうとう》へ舟で渡そうと云ったそうですな。もし項羽《こうう》に英雄の器があれば、垢を含んでも、烏江を渡るです。そうして捲土重来《けんどちょうらい》するです。面目《めんもく》なぞをかまっている場合じゃありません。」

「すると、英雄の器と云うのは、勘定に明いと云う事かね。」

この語《ことば》につれて、一同の口からは、静な笑い声が上った。が、呂馬通は、存外ひるまない。彼は髻から手を放すと、やや反《そ》り身になって、鼻の高い、眼光の鋭い顔を時々ちらりと眺めながら、勢いよく手真似《てまね》をして、しゃべり出した。

「いやそう云うつもりじゃないです。項羽はですな。項羽は、今日|戦《いくさ》の始まる前に、二十八人の部下の前で『項羽を亡すものは天だ。人力の不足ではない。その証拠には、これだけの軍勢で、必ず漢の軍を三度《さんど》破って見せる』と云ったそうです。そうして、実際三度どころか、九度《くたび》も戦って勝っているです。私に云わせると、それが卑怯《ひきょう》だと思うのですな、自分の失敗を天にかずける。天こそいい迷惑です。それも烏江《うこう》を渡って、江東の健児を糾合《きゅうごう》して、再び中原《ちゅうげん》の鹿を争った後でなら、仕方がないですよ。が、そうじゃない。立派に生きられる所を、死んでいるです。私が項羽を英雄の器でないとするのは、勘定に暗かったからばかりではないです。一切を天命でごまかそうとする。それがいかんですな。英雄と云うものは、そんなものじゃないと思うです。蕭丞相《しょうじょうしょう》のような学者は、どう云われるか知らんですが。」

呂馬通は、得意そうに左右を顧みながら、しばらく口をとざした。彼の論議が、もっともだと思われたのであろう。一同は互に軽い頷きを交しながら、満足そうに黙っている。すると、その中で、鼻の高い顔だけが、思いがけなく、一種の感動を、眼の中に現した。黒い瞳が、熱を持ったように、かがやいて来たのである。

「そうかね。項羽はそんな事を云ったかね。」

「云ったそうです。」

呂馬通は、長い顔を上下に、大きく動かした。

「弱いじゃないですか。いや、少くとも男らしくないじゃないですか。英雄と云うものは、天と戦うものだろうと思うですが。」

「そうさ。」

「天命を知っても尚、戦うものだろうと思うですが。」

「そうさ。」

「すると項羽は」

劉邦《りゅうほう》は鋭い眼光をあげて、じっと秋をまたたいている燈火《ともしび》の光を見た。そうして、半ば独り言のように、徐《おもむろ》にこう答えた。

「だから、英雄の器だったのさ。」

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月7日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。